

そっちの方が嫌やろ」  
うなずける話だ。

### 「経済活動」せよ

件の店は、50分2万1000円という料金が設定されてはいる。が、彼女はこんな「仕組み」を打ち明けられた。

「店の人は教えてくれへんと思うけど、ここの本当は2万5000円の中料金店。お客さん入らないから『イベント』で値段下げてるんや」

どうやら「イベント」と銘打った不定期の「期間割引」サービスが慣行のようで、その友達の勤める店も「60分2万円が1万5000円くらいかな。新型インフルエンザの影響やろな」とのこと。いずこもキビしいのである。

福原の各店舗が加盟している神戸特殊浴場協会に尋ねると

「客足への影響は、インフルエンザもさることながらリーマンショックが大きかったですよ。今回の対策を

講じるように、と各店に特別の指示は出していませんが、普段から月1回は女の子に検査を受けさせるようにしていますから、そこで分かるのでは。あとは自己防衛しかないですよ」

理性ならぬ感染と欲望の狭間で揺れ動くのが人情だ。が、現状を「騒ぎすぎ」と断じるのは、小樽市保健所



シアトルの消防隊員

1918年から翌19年にかけて、世界的に大流行した「スペインかぜ」は米國が発生源だった。日本では2300万人以上が感染し、45万人が死亡。生死の分か

元所長で医師の外岡立人氏である。

「今、世界で問題になってるのは秋から冬にかけてウイルスがどういう風に変わっていかうかという点。現時点での流行をとかやく騒ぐのは日本の報道だけです。感染は確かに拡大していくでしょうし、死者が1、2人出るかもしれない。で

れ目は何だったのか。

当時を生きた文学者の岸田國士は、随筆『風邪一束』にこう記している。

「尤もかの流行性感冒といふ曲者は、近時、「スペインかぜ」なる怪しくも美しい名を襲って文明国の都市を襲ひ、あつと云ふ間に、幾多の母や、夫や、愛人や、子供や、女中の命を奪つて行つた」

第一次大戦中の1918年3月、米國で新型インフルエンザが流行する。米軍の渡欧とともに、同年5月

も経済活動をやめるリスクと比べてみてくださいよ。米國だってアイスホッケーの試合なんかはやるわけだから。今になって厚労相は「季節性と変わらない」と認識を改めたけれど、遅すぎますよ」

色街に「活発な経済活動」が戻ってくるのはいつの日か。

から6月にかけて、欧州に流行が広がった。これがスペインかぜ第一波である。

第二波は18年秋、世界中で同時に発生し、ウイルスの病原性がより強まったことで死者が急増した。

文芸評論家の島村抱月が、スペインかぜにより47歳で亡くなったのは同年の11月。翌19年1月、抱月の愛人だった女優の松井須磨子が、後追い自殺をしたのは有名な話である。

第三波は19年の春から秋にかけて。4月に皇族の竹田宮恒久王が薨去し、翌20

年10月には伊藤博文元首相の娘婿だった末松謙澄元内相も亡くなった。

全世界では、約5000万人が死亡したと推定されるスペインかぜ。昨年、旧内務省衛生局が編んだ「流行性感冒」「スペイン風邪」大流行の記録」が平凡社東洋文庫で復刻された。それによれば、国内感染者は2300万人を超え、死者は約39万人である。

だが、歴史人口学者の速水融・慶大名誉教授は、インフルエンザ流行時に呼吸器疾患の死亡率が平年より高くなる「超過死亡」なる概念を採用し、国内死者数を45万人と推計している。

### 高かった若者の感染率

速水名誉教授が語るには、「当時、日本では、1918年9月末から翌19年3月にかけての流行を『前流行』、19年11月から翌20年3月にかけてを『後流行』と呼んでいたのです。前流行では、多くの人がインフルエンザに感染し、亡くなり

ましたが、死亡率は低かったです。後流行は感染した人は少なかつたが、死亡率は高かつたのです」

内務省衛生局の統計記録を見ると、前流行中の19年1月の患者数に占める死者数は約1%。後流行中の20年1月は約4%だった。

スペインかぜの症状について、長崎大学熱帯医学研究所の山本太郎教授はこう語る。

「短期間で急速に肺炎が進み、皮膚や粘膜が暗青色になるチアノーゼの症状を引き起こしました。当時の医師の記録によれば、耳から始まって、顔全体に症状が現れることがあり、白人と黒人の区別ができない、という話も残っているようです」

スペインかぜは、いま流行中の新型ウイルスと似ていて、若者の感染率が高かつた。先の内務省衛生局の統計記録によれば、19年から20年にかけての流行時、死亡率が最も高かつたのは、年齢別に見た場合、21歳から30歳までで22・46%、次

いで31歳から40歳までの17・36%である。

「若者が多く死んだ理由としては、免疫力が強く、ウイルスと闘いすぎて、免疫を消耗し、死に至つたのだと思います」（山本教授）

ほかに感染者の生死を分けた要素はなかつたのか。先の内務省衛生局編「流行性感冒」によれば、

「若者が多く死んだ理由としては、免疫力が強く、ウイルスと闘いすぎて、免疫を消耗し、死に至つたのだと思います」（山本教授）

## 「首都東京」の大流行

「若者が多く死んだ理由としては、免疫力が強く、ウイルスと闘いすぎて、免疫を消耗し、死に至つたのだと思います」（山本教授）

「若者が多く死んだ理由としては、免疫力が強く、ウイルスと闘いすぎて、免疫を消耗し、死に至つたのだと思います」（山本教授）

「若者が多く死んだ理由としては、免疫力が強く、ウイルスと闘いすぎて、免疫を消耗し、死に至つたのだと思います」（山本教授）

「若者が多く死んだ理由としては、免疫力が強く、ウイルスと闘いすぎて、免疫を消耗し、死に至つたのだと思います」（山本教授）

「若者が多く死んだ理由としては、免疫力が強く、ウイルスと闘いすぎて、免疫を消耗し、死に至つたのだと思います」（山本教授）

「若者が多く死んだ理由としては、免疫力が強く、ウイルスと闘いすぎて、免疫を消耗し、死に至つたのだと思います」（山本教授）